

## 民主主義と選舉

市川 浩

### 英國のEU離脱に思ふ

平成二十八年六月二十四日

欧州聯合（EU）への残留か離脱かを問ふ英國の國民投票は本日開票の結果、離脱選擇が51・9パーセントの過半数を獲得す。残留を主張し來れるキャメロン首相は辭任を表明、離脱派の英國獨立黨フアラージユ黨首は六月二十三日を獨立紀念日とせむと勝利を宣言す。一方先般獨立を問うて敗れたるスコットランドはEU加盟を摸索すと云々。

今後の欧州情勢豫斷を許さざるも、EUは歴史、言語、宗教を含む固有の文化を異にする民族を自由、平等、民主主義など「普遍的價值觀」の共有によりて統一的に統治せんとする二十世紀的發想による國家組織なれば、方向は正反對なるも嘗てのソ連邦に異ならず。但し離脱の英國に懲罰の軍を差向くるなどあり得ざるは、軍事的能力の面よりのみならず、「多様性」尊重の二十一世紀特有の潮にこそあれ。

顧みれば昭和二十七年、戦後媾和條約發效の年（一九五二）、欧州炭鐵共同體として發足後、順調に發展を遂げ來りしEUは、遂に國家元首たる大統領を戴くに至るも、各民族の固有文化との衝突も露になりにけむ。放置し例へば、英國にしてEUと一定の距離を保ちつゝも、獨自の經濟運営に成功せば、他のEU離脱連鎖もあり得べし。

我が國にては急激の圓高、株價暴落と反應し、テレビなども日本のEU向け輸出基地としての英國の變化に懸念のコメントなど概ね否定的の受取にて、折からの參院選にて野黨連合はアベノミクスの終焉と勢ひづく。茲には民族文化に關する世紀間の問題意識もなきが如し。抑も明治開國以來敗戦後世紀末まで、我が民族「普遍的文化」に如何にぞ苦しむたる。日本文化もとより世界的普遍性假令有りとても寡し。されば或は劣等感に苛まれ、或は世界革命、武力征服を妄想す。結果無慙にも戦に敗れ、なけなしの固有文化をも失ふ。戦後戦勝國の與ふる「民主主義」に「國の爲政者は選舉により選ばる」とありき。元來受身形の少き國語に慣れたる吾は一瞬、禹湯文武或いはジョージワシントンの如き衆目の一致して推舉する人物に投票するを聯想す。無論實態は熾烈極まる個人闘争にして、その結果僅差にて決すれば、有權者の半数近くが勝者の就任その日より、次の選舉への報復に思ひを致すに非ずや。

今回のEU離脱も投票結果は僅差なり。正に國論を二分しての選擇の結果は將來の歴史に委ねざるを得ざる中、離脱手續の完了を批准するの國民投票もありとして、もし英國民肅々と賛成票を投ぜば、十三世紀マグナカルタ以來最早英國の文化となりける民主主義の熟成を見るべし。片や頻發する國內外紛争に卷込まるゝ新興國、その多くも亦民主主義を標榜するも、果して「理念」、「思想」の域を出でつるにや。

最近、公私混同も法に依らずは罰せられずと強氣の申開きを續けゝる東京都知事、情に訴ふる說得にこの西歐型知識人躬ら辭任を申し出づと云々。民主主義熟成には遙かなるも、情の文化はなほ健在なり。

（平成二十八年六月二十七日受附）